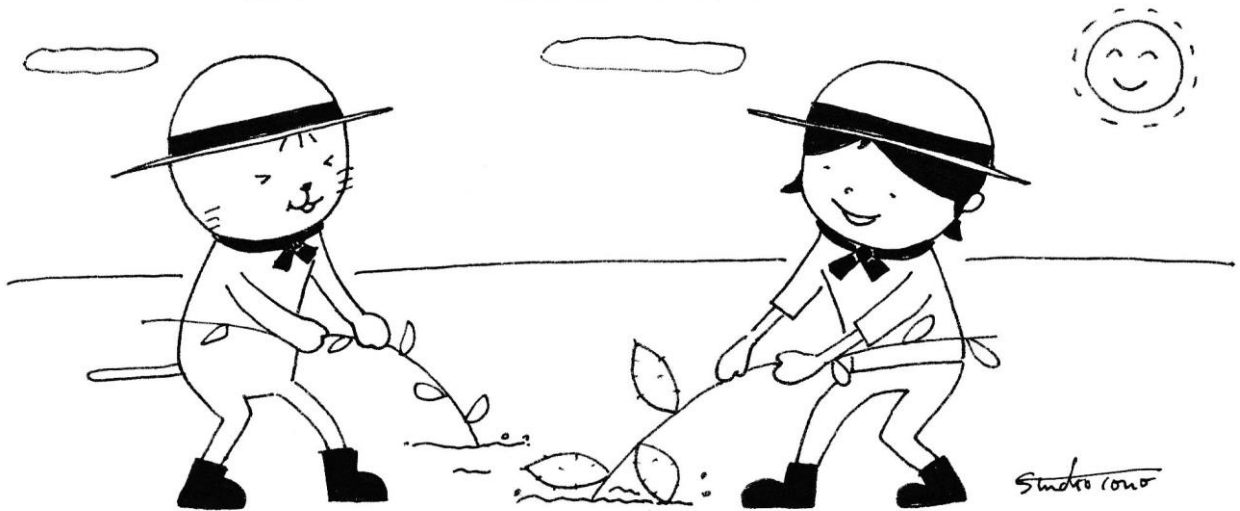


ボランティアグループがつくる和歌山県ジェンダー平等推進センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



日本の女性・ジェンダーのいちばんわかりやすい歴史の教科書

飯田育浩 著 グラフィック社 2024年（A:フェミニズム）

本書は、日本の女性史について分かりやすく書かれた本です。結婚・出産・職業などのテーマに分けて、それぞれ時系列にまとめられています。現代日本では多くの女性が、男女間の賃金格差、社会における女性リーダーの少なさ、家庭における家事労働の負担が大きいことなどの問題に直面しています。本書は、これらの解決の一助となる本と言えます。本書を読むと、先に挙げたような問題は、男性の権限が強い「家父長制度」の名残りや、「良妻賢母」な「専業主婦」であることを理想の女性とするような意識が今も続いていることが一因であることが読み取れます。現代にそぐわない制度は無くし、社会の意識も今にふさわしい形にアップデートする必要があるでしょう。このように、問題意識を持って読むのもいいし、日本史についての知識も深まるような興味深い本です。ぜひ一度読んでみて下さい。

（A.T.）



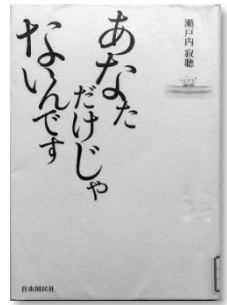
あなただけじゃないんです

瀬戸内寂聴 著 自由国民社 2017年 (K: エッセイ・文学)

本書は寂聴さんへの人生相談です。さまざまな相談があり、それに対して寂聴さんからのメッセージが記されています。

人は他者に自分のことを理解してもらいたいと思っています。私もそうです。でも、寂聴さんは、はじめから他者は自分と同じではないという、その観点にまず立つ。そして、自分と同じでないけれども、歩み寄れば、互いに許しあうことができると言ってます。

みなさんの悩みや苦しみと同じような相談もあるのでしょうか。本書を読んでみて、自分だけが苦しいのではないと思えたら幸いです。



(はんちゃん)

normal? ‘普通って何’

井手上漠 著 講談社 2021年 (H: セクシュアリティ)

この本は、「男らしさ」や「女らしさ」といった固定概念に疑問を投げかけ、自分らしさとは何かを問い直す一冊です。ジェンダーレスモデルとして活躍する著者は、「自分は普通じゃない」と感じ続け、どのようにして「自分を肯定する」ことにたどり着いたのか、その軌跡が等身大の言葉と写真で綴られているフォトエッセイです。

この本を読んで、私がジェンダーに興味をもったきっかけを思い出しました。性別、見た目、国籍など社会が押し付ける「普通」に苦しめられず、自分を受け入れ、自分らしく生きていく。苦しめられた経験がある人は、この本のメッセージが心に刺さるはずです。

(めい)



パラサイト難婚社会 結婚生活には何が必要ですか？

山田昌弘 著 朝日新書 2024年 (C: 家族・結婚)

著者は「婚活」、「パラサイト・シングル」など、絶妙な言葉を創出し現代社会を鋭く分析してきた社会学者の山田昌弘氏。本書は5章で構成され、第1章『結婚』とは何ですか？』で始まるが、本書で問いかけているのは、まさに「結婚とは何か」ということだ。昔は結婚はイエを守るためのものだった。ほとんどの人が結婚する社会から、非正規雇用が増え結婚が難しい社会へと変わってきた。それどころか、結婚などしない方がリスクなく生活できる社会になったのだと分析する。そして今、人は結婚に何を求めるのか。

「結婚とは何か」。本書は結論ありきの本ではないという著者は、第5章『結婚』が人生に与えるもの』で、ひとつの答えを提示している。それは、結婚にまつわる様々な要素を丹念に検討した後に残る、極めてシンプルなものに思えた。

(O.S)



山の上の家事学校

近藤史恵 著 中央公論新社 2024 年 (K:エッセイ・文学)

この物語の主人公仲上は、一年前に離婚し荒れた部屋でコンビニ弁当ばかり食べている。見かねた妹に勧められたのが男性対象の山之上家事学校だった。校長の花村が言う。「家事とは、やらなければ生活の質が下がったり健康状態や社会生活に少しずつ問題が出たりするのに、賃金が発生しない仕事、すべてのことを言います。」「わたしは家事をやることに男性も女性も関係ないと思っています。それでも社会から押しつけられる圧力は全然違う。」と。仲上は結婚していたとき、外で働いて金を稼ぐことが家族のためだと自負していて、家のことなんかやらなくても愛していることには変わりないと思っていた。しかし、ひとりになって、この学校へ来て気づくのだ。働くことと、愛と、家事をしないことを一緒にしてはいけないと。



兄と妹間の教育格差や親の期待度の違いや LGBT にも触れていて、どの世代の人にも読んでほしいけど、特に家事をしない、しなくて済んでいる人に読んでほしい一冊！ (み)

きみは赤ちゃん

川上未映子 著 文藝春秋 2014 年 (F:子育て)

夫・男性が家事育児に携わった時に妻や周囲の人間の中に無意識に生じる、夫が家事育児を「手伝ってくれている」感の正体とは。頭でわかっていても身体や意識に染みついているもの。男性は妻・女性に対してそういった申し訳なさや引け目のようなものは感じないものかと夫に尋ねたところ、特にそのように感じたことはないとのことだった。



自分については我慢すればよいのだという意識は時に同じような人を苦しめる立場に回ることにつながる。チョ・ナムジュの『82 年生まれ、キム・ジヨン』を読んだ時、また会社で自身がパワハラを受けた時にも同じことを考えた。

親となることをきっかけに、さくらももこ『そういうふうになっている』や本作のようなエッセイを手取る人も多いただろう。私がこの本を読んだのも今回妊娠がきっかけだった。今後の楽しみだけでなく未知の痛みや不安も日に日に膨れ上がる妊婦生活。自分の心身に起こる初めてのことだらけの毎日を、笑いを交えながら気軽な文体で描く本作は多くの女性にとって共感できるものであろう。ジェットコースター状態の心、激しいつわりからの爆発的な食欲、夫との不和。パートナーや周囲の人々にもぜひ読んでもらいたい作品である。 (桃文庫)

※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て・絵本 G:からだ
H:セクシュアリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書

辛淑玉の激辛レストラン

辛淑玉 著 生活情報センター 2003 年 (K:エッセイ・文学)

タイトルから激辛料理を出すレストランのガイドブックかとページをめくると…あれれ？ちょっと違う。もちろんスパイスに関する^{うんちく}蘊蓄はたっぷりあって、読後はキムチ博士になれるくらいだが、この本のメインディッシュは「激辛四兄妹」と銘打った対談コーナー。辛淑玉、上野千鶴子、佐高信、安部譲二という辛口がバツバツと世相を斬る。

2003 年の刊行だが賞味期限は切れていない。むしろ漬け込んだ梅酒のような味わいがある。料理好きの方、お菓子が好きな方、お酒が好きな方、昨今の政治に疑問を抱きピリッとした批評が読みたい方に特におすすめである。

(紀生)



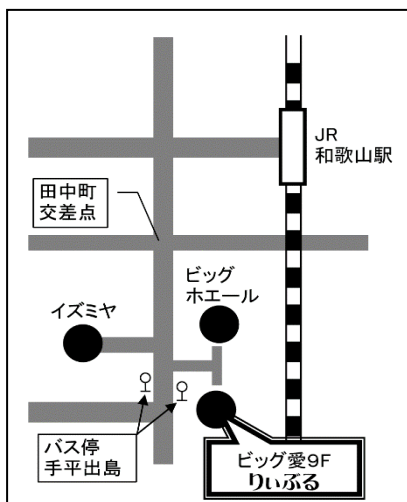
わたしはわたし。あなたじゃない。

10代の心を守る境界線「バウンダリー」の引き方
鴻巣麻里香 著 リトルモア 2024 年 (F:子育て)

著者は女性と子どもの支援を専門とするソーシャルワーカーである。「ソーシャルワーカー」とは、生活困窮、病気、障害、暴力・虐待、不登校、いじめ、体罰、子育てなどの困りごとについて、役立つ社会制度や法律を探したり、医療・福祉、心理などの専門家を探すなどして解決の手伝いをする人。「世の中(ソーシャル)にある制度と人と関わり、その人の生活がより安全なものにあるよう環境(ソーシャル)を整える人」とある。

著者は、活動の中でわたしとあなたの間の「バウンダリー(境界線)」を侵害されてトラブルやもやもやを感じている人が多いと感じている。そこで、中高生向けによくありそうな 15 事例(友達、家族、学校、恋愛関係、SNS)で考え方、対処法をわかりやすく解説している。

(か)



この本 よんだ? 第 31 号 (2025 年 10 月発行)

◇企画・発行 りいぶるぷらす

◇協力 和歌山県ジェンダー平等推進センター“りいぶる”

【編集後記】

今回初執筆の桃文庫さんは、最近和歌山に移住して、春に無事出産されました。書くことが好きとのことで、ご自身の体験と比べた本を選びました。

★あなたも書評を書いてみませんか? ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。 E-mail libreplus@yahoo.co.jp